



平賀實記

坤

又 6
9386
2



安田文庫
秘
不出關外

平賀實記下卷

源内離落し始て對面し事

東都神田玉池
安田文庫珍惜

初て源内ハ約束の目限も及れハ往々連一瓢
定て趣き來タ離落ハ未タ一瓢ハ酒肴の没
念ひしとや遂とて清居了、之程離落
加ふゆゑ一瓢ハ表口ハ迄入れハ清没る
一瓢やそ座あり葉内とて源内ト引合り
源内ハ具子入リ酒數杯を及て日己ハ西に傾キ
これハ源内離落中よりハ先ハ今日ハ宗
日ハ存念まては上と云々大要之今日ハ悦ん

くすすと各利欲源中老をい合供して入報せんと
云ふ多くある事て凡令以五百ある時分の内集り
りり源内ハ旅用素殊れなくして吉日を選ん
おとせんと工事をせしむる大老の合符を
備へて府中自由を通りしるる事

源内府中参りの事

源内ハ旅用として佐人馬人互連てを分を
家物をおきて悠々と旅立しして府中を
きして急ぐべき事ハ非ハ此の名所舊儀を
尋て旅用掛り四日程入湯して夫々發別

這入りしハ人足ある大老旅用掛りお次と
足とし平賀源内と掛札して旅用掛り宿札おせ
大老の老を泊りしハ宿内ハ評判しては平賀
源内と云ハ本所の与た世分方と世話致し先年
は旅一人のりは旅子ハ立身せられと云ふ
夫も同名も数多けれハ計られと云ふ
きりり源内と与た世分方と世話を立中りハ
以左老も不承以別条と云ふ掛者等ハは度不用有
長壽ハ世分方と云ふ掛者等ハは度不用有
以世話を立りし一附をもちし且つ世中の

安否もゆやな我我の怪あかしく金廿両有
の七五子ゆつ中始に近所の三方より振込
つては捕者もあつて我我苦れとは夜の町中ハ
ぬに沃合の落るる私のお用はるを不の蜀侯ハ
致し難しを内て裁目と使者を以て送るるに
ハ宿内の評判と云々又目録並使者の趣減子
主方にお達るる先きるは方々を連られぬ来
逃ゆつて捕獲せしむる大にお達しぬる
るやんと不害晴されぬ金子得られぬる
殊に社中一等のるるれハ多しに返答しぬ

使者を度しつ中を呼集評談せんと先中一の
つ中源一の趣きと云を呼よせぬる趣き
これハ趣きも入一向不害晴しを返つ中
近集りぬ耐役致しぬは方々ハ江戸表に音
信しぬる事つ度りて捕獲を以て人殺しの沙汰
をしぬるの外警しぬ捕を源内ハは方を返く
へきの計ぬるやと智恵思ふ者ハ人付又不害晴
者ハ左に多しす人殺しの不効しぬ世
る成しぬとあつて各評談に之れを打探し
へきハ非されハ一人趣き代りて源内

旅者ト禁内——幸佐の謝礼中入りし源内と
あ人の未来りしと比深草の惣在りしと系
れ——やと尋られ、五次の未成能惣在りしと云人
の中よりと中られ、あ人を本陣の産家に通し
暫くしてお違——形相識は威儀備ふるもあ人
も平伏して居らるる源内は過順よと業を業
らけお違、あ人もよくとて、対面し、家内も
此別業を——と、四方山の味し終りて中より先手
取お江戸表に下りし、瓦瓦連し——奴は何故——
居らと尋られ、彼は只今高貴人と成りて

本所迄に居居致しと中られ、源内寛々と笑ひ
彼は志し盡成者之我おる、大望する方の上を驛に
招きあられて、叶ぬ故彼を偲てお違せ——を誠
心はき度方も、驚中されつらん、一旦偲を以て
南無のつぎを款し、振られと、取お唯今よと、
志を以て、時節は、是時よとて、あ方も、先
年の謝儀をも述べ、今と強は、ありい
と、と、あ方も、世流のそと、ある豪傑の振也と
大丈夫の形と似る振られと、始末がし、暫くも、
順逆の論は、又王武王の形状を、て、り、る、也

以来能く學問して男子の氣象を磨かるべしと
申されし人も恥入て師方の言の義を忘れ下郎
の言葉に任仰し源内方より音信もせざる候り
今又何處に云籠く赤面したる中へ又源内へ金子
五兩を申しけ金子は彼に達し奴に金を送るべしと
念ひし酒肴を設けりて休むるべしと申して
後にも物置と申して申し入られし人も恥入て
不々宿所に泊りて居るに志しける事ありしか
と左馬も恥ぢて何と云ふも一き方便なく評論
の事と改せし源内へ旅用を申して與へて

本町迄をきて急り

評し曰源内強河の振也實は大大夫と云え難し
不々強河の内強河は根城之振は旧知の者へ金銀
を以威勢を震ひし本を亡くすは尚ほ其言は
大大夫の沙汰に不及

源内再び長崎に就く

日教は能く源内へ長崎に参りて先年修く世話に
成しサカサ城を告と云通稱の方へ案内せし事あり
持参して先年世話に成し修く耐礼を以て述て
面談せり其言も懇意なれは先く私宅に参付

弦として爲る方々を旅宿するに易きなりと云ふ
上七巻杯持系して實情を九斗い誠は強いの
振也とい表裏の違ひにまふ吉雄何来り鞆内
あして紅毛の屋敷に九斗は金も移る買を
将時の内はあつて大坂津かきを中付り吉雄
の儒家渡辺太花とい平候するしと云ふ
彼は度来りしと利欲の爲に来りしと云ふ
彼も才子之義合頭多く持系して抜ける
買をいふ風儀はあつて吉雄の風儀を成し
元来利欲はふりしと吉雄の氣象の上は風儀

初め時ハいふ所の大方に何年して源内を進拂ふ
下と秀才なる渡辺工事をせしりきつと
存付るるる紅毛を禱の吉雄何来を招き
そうよ讀しるは度平候源内といは地は云々
何れ利分の沙汰より元来彼は才子之義抜ける
おもふ工ませは長崎の大方に彼を防ぐべきは
心よ左と云れ元来吉雄も才子といは一言
ふん付成程を度平の位にいく大切成るの
長崎の念を越すぬ振す下と喉をいふ

吉雄源内を欺く事

紅毛大通禱吉雄幸在也

源内ハ初モ知ス吉雄ノ方ハ易ク入リて何年
後荷を賣人と手合シタリ或時吉雄に中タリハ
取ルル何年後荷を調ヒキ老之尤後荷の事ハ
天下の法度ニ容易ハ成ス一俵後荷同前ノ
事トモ中分ノ法方モ中取及テモ重度採ハ數年
來の勤メ定めてテ振ノ事ハ要シ〜人トナリレハ
吉雄也此等ハ相々惜キ奴ハ渡ルル時季の事
お違フ一ハ源内ヲ欺きて才の自慢ナル事ヲ
ヒ〜人と工吏して或後後荷取ルルハ振者ヲ
入テ随分味仕之夫ハ後荷の仕振前ニ捕

ハ老老ハ無細弱主〜源内相違中〜人先後荷
と中ハ天下の法度モ其之知大切之事ハ後荷
を賣人と存ル奴ハ振渡モ其之振師ハ金子を
らせ田舎人モ應ハ然の内ハ振の引取ルとの働
キハ源内モ振船を五鳴沖ニ五里ハ余ハ
然霧源内ハ五鳴の保ホカモ尺ハ差ハ在る船の
来る時節を考ヘ毎晩〜此波〜ハ相違船沖
尺〜ハ海上に〜ハを見す〜ハ振の内ハ余付
唐船の向方ハ出〜ハ振相を賣ル相唐船の
向の方ハ船をと〜ハ振〜夜ハ満ちて然霧の

暗内陸より上りて尤甚なる法度ありを因縁
まで見張りぬけしや手也——を致されは濡て
捕られぬ中互捕ふ者の拘留せし傳りられぬ智津
津内ぬいりぬハ船務の内は買えぬハ吉雄
我を欺くぬ中ハ船をかしぬの事ハ買えぬ
何条手首の不入りぬとん中ハ悦びぬて誰彼
るハ船頭をかしぬ一人まで買えぬ——
吉雄ハ大切の事ぬ中ハ承引する体なり——
何となく中なるハ船を廢棄ぬ法度ぬをたぬと
假自由なれハとて天下の法令破れぬす

四方山の拘留して津内ハ一りハ入ふり吉雄ハ津内
面現一方ぬぬ趣を見てぬり彼必一人まで買え
の志ありきハ彼ハ一とい合ひせ長後の船を
とてく——と演の町ハ船頭の前ハ云々ハ方
組下の船頭中渡主——江戸表ハ平登津内
と云者来て抜荷を買人と云ふ志あり彼我方
旅宿せりぬは未きりて抜荷を買人ぬを船
まハ金子を存分ハありて船をかし沖中
連りて縄をかけぬ金子ぬありぬを上り
天下の法度破りぬ未きりぬ引かぬと廢棄

こゝで隠し目付よりさういふ抜荷の場所
不埒内より抜荷の致し方不知して江戸幕に
御金の上の釣の時分中上格より夫の抜荷の
致し方且場所をえんと先船をおさせて
その上金子を以て引入んと計りしに然るに船頭
ハ腰を消し勢入るゝに船の抜荷窓をさるゝ殿
家此法に之え事私あると一向に成りやいと云られ
源内ハ氣色を替へ人より大層を打明させ包とて
つませんや責候するふと素二つと顔色替て云
られ船頭は一と子勢天に左格よりハと喚
ひそくよふおきくし正九分船を家おししと約束し
て源内ハゆりゆり船頭ハは中を吉雄方を知せん
急ぎにやとて近行り

源内長崎を立退事

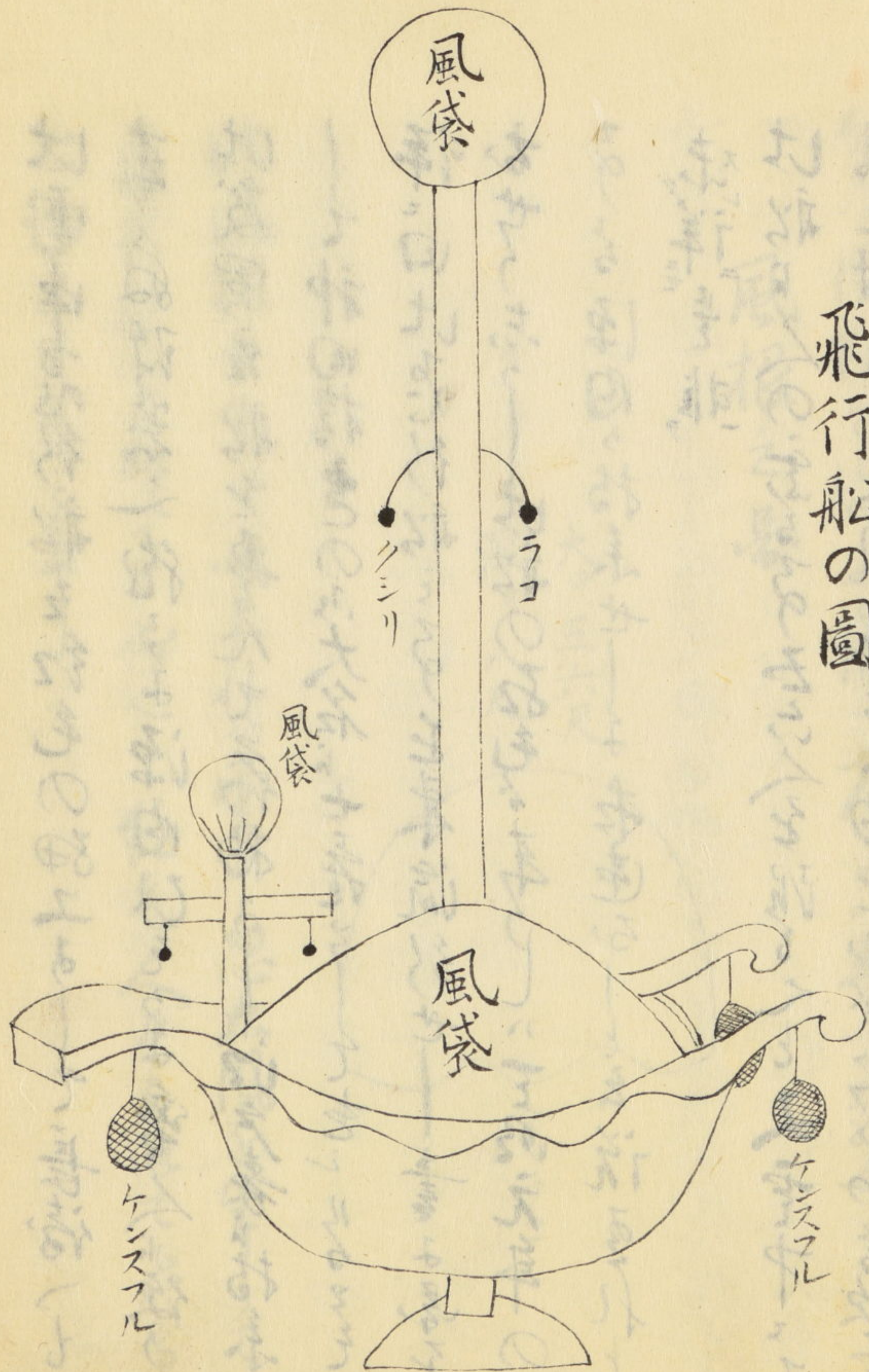
初て源内ハ吉雄許ハ態と不埒九山意の悪お
越き家事を振きて中よりハを方ハ先へ戻り唯今
の船頭を又ハ和の船頭らしき者吉雄の宅に
来るや否を以て足座早速我おし知れと一
毛頭急るるふれと急に中付を以てハ小泉と
いふ茶屋まで泊ると飲んで待てしに船頭早速

云々れとんの内ハおきとられと仕方なくおある日
 候列して源内を度しう吉雄ハ手配入源内ハ
 邪智也男人と先渡知たれり許は所候
 候うられハたれも思き才を感して世傳の智恵
 をんせんうして源内ハ欺くれ技術も存分ハ
 買れしを度し造帳ハ存せしとて

源内江戸に忌むをのり

源内ハ秘なく江戸表に忌て手をせしと求る
 及多きを知る人ハ七五をうして指しし中ハ
 雲中をみる大船あり是左に記す

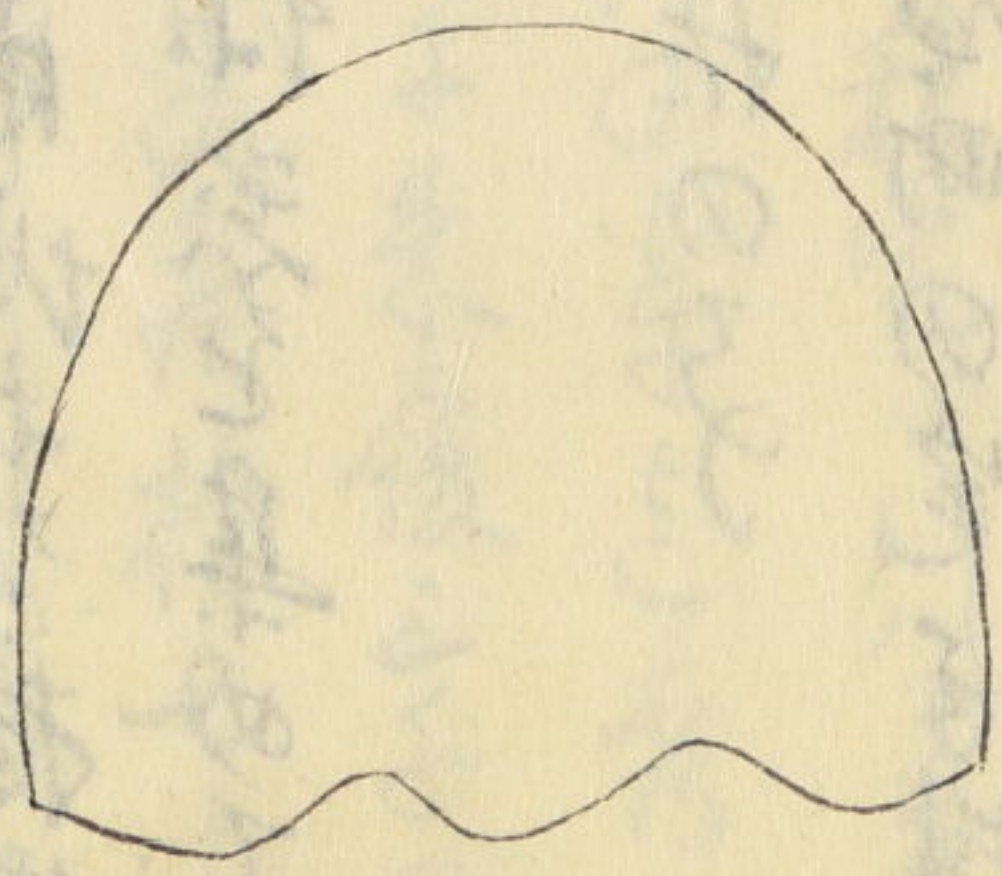
飛行船の圖



此雲中飛船を紅毛の細工ありて長崎にも
 来ぬ珍装之船より源内ひそより番人に便り
 此夜更に船を寄せて何物あり江戸表に持来
 して神田橋邊の大名に仕立せしむるを
 評曰此飛船より来る流石なり書き書を
 おせしむるは此船の紅毛を来りしハ天明元年の
 事なる源内が持来せしむるを述るゝと云説されし
 未詳ニ是非

是の船は人の来るより五人を隠さんと又雲中にて
 風止時を布し風根と云物を下かたり吹上る

風根之器



大廿五六尺
 深廿八尺

タハラコ

此風根を下か吹上れば雲中忽大風を生じて
 飛船を飛する妙なり紅毛人等を以て此器
 と稱するなりと云

大の飛舟航ハ出る大谷ノモリヨリ今ノ生船
ハ彼方ノ左ル中ノ源内弥世ノ上評判ヨク本家會
日ニ長シテ大勢群聚一又人參を植付んと
以醫師方を以テ用土地を相借一偏ニ
醫學館の如ク私達の疎密を集めて實ニ雅會
ヲ爲スルヲトシ

源内橋本町ト居ノリ

源内ハ志を以テ随テ白壁町の宅手扶ルハ橋本
町ニテ賣店を求め英業を以テ住居セリ尼分
ノある世の中ニハ雅俗の隔トシテ源内

方ニカ入りテ源内ニハ小橋ハ物見言キ苗所の
事ニハ疎密細工を以テ素人の人ト仰ルモ奇ニ
一藝ノ名を以テ老をハ私宅ニ引テ暮シタルハ
細工を以テ儒者醫師僧侶の輩ト素人ノ才の者ハ
集メテト云フル一實ニ朱後ニテの客トモ云フ
一其の中ニハ佐列松本の産物セト云者ハ何
秀才なる生質ニテ火浣布の製法を知レリは火
浣布トシテ本家の製メテ火中ニ入テも不焼
トシ垢付ク時ハ火を以テ洗濯スル奇妙なる布ニ
是を製メテ世の中ニ廣メんと源内ト云僕セリ

は布を織る綿ハ石綿とて深山の麓石上生る綿
の如くる者之は古本名山等と云ふ事也源内彼を
案内して本宮趣彩を拵事つて己二階を織
及して日と急振られハ早速成就して火中
投入されと焼ぬ事妙也

南部云火浣布を化りしハ是か前のも
依て世上与々稱して諸大名が求人と乞ふ者を
知す源内大に貨殖して又石綿を乞ふて
大廿五丈幅五斗に拵え夫を照し流布して
公儀にも評判あると云

世に按は布は大きく織ハ甚妄之大十三段
四方又ハ六段四方を限とす石綿元来堅き
者灰火を磨るに耐ふる事して折砕く
人皆香を拵る用ひてを敷居とする有様
とも長キハ不冗と香も用るに耐ふる事す

源内火浣布を以て石綿を覆ふと云ふ

源内ハ火浣布を拵る化り立は布を風下張
ハ大火の良と云ふ火を防くる能ふべし今
浅草山等ハ大名方防を夫ハは布まで大袋
を作り石綿に拵ハ乾焼の糸を穿しと云

あり及具ある身より子連中出——と理非分はより
これに源内も理より伏し居る方こと心中に越え
の急量を感し——実より町を新の急量として火浣布
此沙汰ハ止まり
評曰越前より源内を中をより灰部
ろとこやろこいふ火浣布のろ若かりて此の
火防に致したるくと手廣くして惣町火消も
代りて新ぬ——灰部町家の困窮眼おこと
厚々灰より灰部——と——実より其急に急——
を新蔵に

石の苦と
書せし何
しノ書ニアリ
ヤ尚考ベシ

惜按はるは當時評家の云ある言に況や彼布
相をついて火を燃はれ布に依然たれ中
物灰燃と何事一矢よりす——評の言
面が着を説く 石の苦と書しるは石中の
綿之為人浦井氏昌東學は在り時より
新て厚紙を以て綿を入れて捲紙條と
て減ら灰より灰部知——

源内淳世を伝述懐のる

新て源内ハ種々の工夫を思ひ——ると思ふ
るより人なりれハ我よりハ人の文の也——

たるといふては我も成程に神斗り神
々去今を評判より免角滑物なるを
幸哉世上は浮世本とも流布して恒為才の凡俗
有りは此より衆して人の情を招^いえは又臨
材ともありてと思案して程々浮世本を
著述して梓行いと盛なりとて或は源内
りる世上の学文の如く居りて文字解杯
世は流布しあふまふ居るものゝ家も又懐
と相名やとあるなり彼は 將軍家の西徒やて
右田重次郎といふ者之を習ふ者と云て狂詩

狂文狂歌の名あり彼を我術中に入てともある
を斗ふと食客の老を媒女として急流を合
南畝曰有り愛源内は始て逢へハ昭和四年
丁亥の秋之に谷村香煙茶屋稲毛屋金太の川内山
賀郎若澤先生の友人として智人の内蔵君
尋ねて南條山人川名林助と云隠居する所
祖来の志士一幅古今詩刪を贈りしるなり林助
高井山に立ちすと云ふなり右林助は眼を
有りは時林助平賀源内方富孫と云て神田
白壁町の尋ねて源内は始て逢ふなり

お見せし之寢惚先生文集第拾巻をお示して
早くハ讀めず其懸念ヲ讀んで笑せしハ大
きき稱讃せし之事も悉く源内ハ他の根柢を
志及行^徳を以て面白く思ひを以て前より其の
写しをく

け時分井上信安といふ者より其の凡雅な振ふ
志よりて智恵々々といふ者も雅會を催し其の
中洲道繁華の土地を時々借し其の信安親画
を以て其の唐画師其の園石の骨子に或時源内
の宅に集りし時源内より其の亦其の画像を認て其の

一、梨ハ實ニ齊の信安子に似たりと云ふといふと云
これハ信安完承と笑ひ梨ハ信安仲とハ信安居士
なり信安を能く知れり其の由合を形表を能く
是より其の度よりいふ信安仲とハ知る人より其の
中より其の度よりいふ相違の人相之と云ふこれハ源内
彼の歌を破らるるを知り又相違するを大に
感し一應無き入しと云

源内信安の事

新て源内ハ種々人を撰くといふこととして其の
一なるを以てつらく世方の其の歌を考ふるは尚也

予も文を争ひ利を競ふ風俗なれハ實は天下の
 浮世之象何程文を廢ふ大申く志を立てるるな
 へくす今國の末世の如くして而も祿の世の中
 ありくをせり生し出ハ是れ永身の不幸に能る
 を免せハ其福を文と思ふを免せハ罪をうく
 中庸の人とありハ人の上なる生涯にて今
 世上評判なる山師と云者こそ世を不遇な起る
 あり能く世の志を治め時ハ教を捨てて命を
 捨替増長して終るや如く天下皆然
 なる所を以て世の俗は創せざる事

誠は是非も言ふ事なく今よりして世上を離れ聖堂
 へお勤して孔の徒と成——と云——う名を去る
 事ハ我々志願之人召の性を以て玉恩を報せざる
 ハ禽獸ハひ——何卒一事たりとも玉益を擡て不朽の
 名を残さるんハ死を忘るす——以楠正成ハ
 未だの魂は念を留めて且利言氏に恨を述——
 例をこれハいうては終は終らんや尺蠖ハ伸ん
 為は居るるる潜龍の地中に入るる——是は後ハ
 表を聖賢のつは抱ひ喜は桓文の霸業を抱き
 終は天地を震動せんと自然状を改てた

上下を忘る。操人子を對せしむるを、
りうに去るを念ふれば、兎角も端緒にのちを掛りて
さして仕上るるをふられ、自分かゝる方の終りをふ知
は、後をいぬまゝと、新田軍發成、又山林林木の公益
を考へ、己の欲をんぢ、源内、運のそ、ふ之終、橋本
町、罪を請けて世のそをぢり、り、は、惜るるを、
運の華、清婦、山中、入て、丹穴を探り、貨殖して、一畝を、
とは、平賀源内、世に、過せざる、不幸と、世に、才を惜、り、や、
を、積んで、罪、を、免、る、才の、為、之後の、才智、を、
趣、不朽の、名、を、盡、す、べし、
天保四年癸丑六月、借抄于、堤、能、風、 鈴木、愷

鳩溪遺事

白藤鈴木愷補

鳩溪乃、人、の、鳩溪、ハ、山、師、之、と、號、せ、を、懐、り、て、南
畝、菊、對、し、嘆、し、て、曰、世、人、の、智、計、の、不、足、を、不、知、智
術、を、名、を、恥、し、て、山、師、と、号、ふ、然、る、を、事、皆、不、得、律、
義、者、と、し、て、行、く、自、ち、う、謹、ん、と、稱、し、教、弟、す、れ、
不、前、弟、本、と、同、く、朽、て、泯、滅、す、
量、大、丈、丈、の、る、
る、ん、や、丈、人、ハ、五、具、を、不、食、ハ、五、具、折、り、
を、ん、社、を、
こ、る、れ、先、生、和、漢、れ、丈、ハ、趣、せ、う、清、く、試、し、一、二、を、論、
せ、ん、自、古、和、漢、帝、王、の、相、公、侯、皆、山、師、之、故、
以、
時、ハ、

帝王公侯伯子男之時、絨と成叛逆人と成漢皇曹操
司馬懿以下帝王及我 中邦柏軍寧お皆然と成
と不成とよて舊從地を望む 量人の過不遇をよきや
昔年某書を解する人あり桂川甫固君僅よ七分を
讀み上レキテルの法を知しを其過庭を呈する不能鳩
溪は謀て曰は茲六七分ハ法を以てれしを其を呈
する不能汝囊底の智を呈してはるを以て人なりと
鳩溪答て曰は種方甚々奇く然るくハ小子力を竭して
考見んとそを呈を呈記し以て數日を經て其術を
以て終よふと神社の肴場よかして人よ示せし

後年某學大に開ケ其書を讀み數年上レキテルの
方をよく解し以て其方鳩溪の考しと符合する
智者の人は絶せらば一事なるを知月池の茶の言橋觀
某は讀しを記する橋觀某ハ歷例は精しそ大坂
に正てはなかりし人之意は源内才を稱せしと後の觀
某氏予は讀む

昌平の下吏浦井傳花嘗て鳩溪よある鳩溪奉錯
怪しむときり多し或ハ通所ハ大成家を嘗し伯
或ハ某底よ入て重天小袖一ツまで括る然る金百あり
ハ必しも知ふ者よふハ是某金さくそれハ何なり

ぬはづしは者なれはるをぬ脱しと云しと浦井氏
火浣布の成時捲紙條を記ししを一人に

南畝一日鳩溪を訪ひ談話して居せり戶外へ浪士
坐を象りて一談を乞零落て憐鳩溪僕を顧て浪
人ハお互は同一歩を志むし予も智術を人ハ
彼と同一般の生活するんとを自負は予を若輩の
世をみるも皆自負を以て中にもいつか或る信や二信
の米粒豆の裏に付てハ歩は自立するしと云或ハ天下
陳皮を知りしる医生を以て是業刀圭を以て人を療
する誠より嘆息しし陳皮の事を詳しせんとし

来り阿し不学医より目を差するを説きすし
杯終は矢人より或るは宜し

矢口渡の津瑞瑞大に世より後六部りり前大平
記古江隈原氏恙州系矢口渡後篇馬智智富漢之
是皆矢口渡移りしれされを以て文て記す
多し予少年時検閲して是方より服せり

一高鳩溪よりを謀て曰小子高なる数年不富不貧
旦夕の憂なく能く他人の一時は貸殖しそ累臣弟は
至るを足れは頗る羨先生何と一奇策を施して
小子に教む鳩溪養て是下の不為凡庸人の事はて

所謂板まで流るゝす終方を全くせんハ世第といふ
——一事終入の業を創人ハ不可之凡人平易坦
途を以てするを成人と欲するも不能成一の奇計を
以てするも成時ハ方を亡て不悔を主張して事を
施すんハ大業成冠——且下も風波艱難を不屑信の
所謂方を捨ててこそ進む世といれといふ讀の如くせハ
何より成る人といふ人又問彼ハ人今も随てする
と成人何年一の高の力を教むと鳩溪如し案し
て今冬季淺茅の市有人目おな物を悦買ふ
を好^{ハリヌキ}下脱砂の陽拍を他金貨を糖て煮て煮てしも

る仕換しかハ江戸の家を沽希し田舎へ引込人と見
しを多を成ししそれも江戸人目多しと他の高介
目ハ下ハ皆に捨て他人利分れて當るゝすめス
秘して人ハ主をへす家の紋を揮て金と成し陽拍
式ニ方ハ化して煮て煮てと教へる彼人僅てを教の
如くす大ハ人ハ收ひられて利を以て陪蕙して大富貴
と成るま今に至りて陽拍を市ハ煮るゝ新なる
鳩溪淳瑞臨本成る毎ハ第稿を南詔ハ示しては秘
何の古る和漢の事言を止入てむら——と托せり
南畝乃ハはるを予ハ流るゝを摘句尋章ハ匡てせす

字の大ききを得て用を成して知れを耳目聰明一皮服を
雖耳より必運用圓活左右揮霍恰も腹中万巻
を収るるやくを敏捷敵愾可致

予童時山内士訓の家より書を学し一時南畝翁来
りて士訓より告て曰相一の傷鳩溪失心して内中子を
害せり一豪傑を失ひ一嘆嗟は不埒はなぬる事なり
一二月以来二人鳩溪を造りて紙をとりて書を讀み内
省て我は以て是の画なりと信じて紙を展覧上
一人溺をかし若下一人の頭の上より溺り流れたりし
を其人注視して産する事なる事意氣揚々

予て大に悦ぶの色あり其人画素を不帰鳩溪素
より深謀を意の人の定る儼然ありと相攻り數日
考れども其意を得ず亦後數日予て失心せりは時
已に頼ねの落るる事なりと信ずる 後世の事を以
て後牙を殺せりハ其子實頼は鳩溪の秘して坐た
る所のを竊と知せりといひ讀みしときあるを以て
切害せりとも云或は當時の切り者松本直利は鳩溪
と參謀するてかく言ふ事なりしりる或は後世と
疎濶して不追付鳩溪も亦此人を階梯として其し
為に詭計秘策をかし後世の事なりと其書を授人

傳ししより七八分してやはくを懐りて失ふせしを
云つ後ハ少年之武階は寢るを斬り踏きて馳せ
よ折節雨ふりて喉口に入りさ袍の底はハひきされを
死せし之稻毛や金右衛門ハ狂歌を嗜て名を平秩東化
といふ鳩溪うつ人と成る因事未だて例の山師之水の
以懐といふ中本より昔年の花つ徒よ入てそ法の心
しうきるを知り 官は訴人せしよりいふ鳩溪著
撰の散逸せるを輯て花底業と名つけ下刻す
自分序せり此勅定組頭土山宗次郎とあるを内令
を以て始て堀夷より入り壬辰土山川の陰易を害はし

てゆりふ東堀夷松前のもろろハは人より始れり堀夷
より以時宗次郎よりある留別の詩より 醉別高樓酒

若泉漫歌伏櫪玉臺前毛邊韃韜三千里無限秋風
度白川 後土山宗次郎が奔せし時回くあて山口

親音は宗次郎を隠しり隠れて誓く出せしれ土山氏
ハ刑よりあせし我が暗没せし我が家より草花 法といふ
書を蔵す東化の著之題る文才よりて親を降数程
より皆不刻南畝の家より蔵す

有馬吞空君 千石諱予昔年我中ふは在し時大工鳥
亭馬馬あつて我廠のぬるを以てより内儀れり小半

の思きを率事うて繫重くを不ハ安永七年戊戌位法

管光寺開帳

于時は開帳大に引れて飛と冥室とて

よて申を

上より中腰をおうし由讀賣
不知教く予う上軍の時

ある回向院にうけりし時馬馬嶋溪

は向ひてはな管光寺開帳大に引る何そ更して利を
獲る計もやまん嶋溪より我一計けり小サキ果年を
買まれそ一疋を沼澤内家より牽引て一二枚をて
牽事をも見れハ脊筋より南無阿彌陀佛の字果毛中
白く現れと見也馬馬嶋溪より不憶るゝある縁託を傳り
化りてある親相場よりおし看者め憶りて馬馬許
多の利を沼澤高とるれりを始にありハある我既より

繫重くを後ハある家化りて是より花せり嶋溪の某
を用ひし也奇くといつとと讀む

之京軍軒染栗山を譲て東方より北栗山も今日
用るよりて平賀嶋溪に之を事を便せんと通町迄は
左一を沼澤軒化てあるゆり人々幸よりおんせんと云
栗山云いや左様おん好む祝の人よりあるある人
果なよきをん重くし學問ハ云々人々と云彼宅は
以んるよある生に女人在夏のもくしうすきや端を
是よりよき
の袴を穿てり又連おあるう沼澤内
よりよりて割せしふいと志うけの火御もて不文ふ

武よりき程よ火をおこすと以て 田樂を焼て武人よ
佐せり談敷刻りて栗山問て曰戲言より此の土を
とハ溺死せる人の惣名うて女をもかく云んやと人よ
問れて確とつほりあう 是下何ぞ説はるきやと源内
即ち答てやうり土を此と云て然らん世人好色の者
と云て助言といふと男女お通して云ハ苦むる道
と云哉ともしを吐言に矣するやは敏捷の感を人中
せしめてよりく恥づる男人とて閑宮白水君の御軒に
ゆりて云



枹場総泉寺本堂の左の方井戸の側は平賀源内の墓なり
 源内獄中より病死せしを本町の某店池永に遷せり
 総泉寺に葬り友人坂田玄伯墓石を建りと云碑面は
 平賀源内墓と彫り下は知見靈雄居士と云安永八年
 乙亥十二月十八日とあり

安田文庫
 秘
 不出閫外

東都神田玉池
 安田文庫珍惜

平賀實記下巻終

江戸四日市
 古今珍書
 達摩屋五一

平賀源内墓
 終

